

司会(大戸範雄)

科学技術の国際連携戦略シンポジウムは、今回で2回目になります。第1回目は、今年の5月、同じ場所で開催し、日本とアジアの科学技術の国際連携戦略の一つとして、アジア研究圏構想をご紹介しました。アジア研究圏構想とは、アジアの国際共同研究に対する国境を越えた資金援助、アジア地域全体での人材育成、アジア地域の研究インフラの共同使用等を通して、アジアの研究競争力を底上げしようというものです。

その後、5月末に韓国の済州島で日中韓サミットが開催され、日中韓三国の首脳によって、アジア研究構想と同じような内容の科学技術連携を行うことが合意されました。本シンポジウムでは、このような日本政府の科学技術の国際連携策の進捗状況と、既にアジアで活躍されている社会起業家の皆様方の活動を紹介し、科学技術の国際連携に対する理解を深めることを目的にしています。

このシンポジウムは、前回と同様に文部科学省、経済産業省、外務省、内閣府のご後援をいただいております。この場をお借りしまして各省、及び内閣府に対して厚く御礼申し上げます。

挨拶(旭岡勝義氏)

ただいまご紹介にあずかりました、日本工学アカデミー理事、政策委員会副委員長を務めております、旭岡でございます。共催者を代表いたしまして、私の方から一言ご挨拶をさせていただきます。

2008年のリーマンショック以来、世界的な金融危機が起こり、その金融危機が実体経済に大きな影響を与え、日本だけではなく、世界中で経済危機が進行しました。こうした中で、この一年に大変な変化が起こっています。その一つは、アジアの新興国が経済危機を乗り越えながら、成長軌道に乗り始めているということです。

この間に、GDPとか、国際競争力とか、大学のランキング等のいろいろな指標で日本の存在感が低下しています。日本は、ある意味では危機的な状況になっている感じがしています。日本は、今までアジアに対していろいろな投資や、人材開発をし、また低コストを求めて連携をしてきたわけですが、この1年で、中国を筆頭にアジア全体が大変な産業の高度化の時代に入り、日本を取り巻く環境が大きく変わってきました。

こうした中で、このたび東アジア・サイエンス・イノベーション・エリアというものを日本が提起し、アジアの研究開発の未整備状況を変えていこうことが提案されております。エネルギー、資源、環境、高齢化社会等様々な問題を日本だけでなくアジア自体が共通の課題として抱えているわけで、それに対する科学技術協力の役割というのが期待されています。

産業界では、円高という状況に対応して、海外に生産を移行するということが継続して起こっています。トータルで約36兆円、GDP比7パーセントくらいの生産が、海外で行われるようになっていきます。また、日本の中では、雇用が大きな問題になっていきますが、

世界各国では、優秀な人材の獲得競争が激しくなっています。さらに、スマートグリッドに代表されるスマートコミュニティとか、スマートシティ、それから水、再生エネルギー、交通、都市開発のような新しい社会インフラ事業が、全世界的には約40兆ドル程度の市場規模になろうとしており、アジアの新興国がそれらのビジネスの中心になっています。

その他に、今年は、3Dのテレビ、携帯電話の応用、電子書籍といった新しいイノベーションが大いに起こっております。アジア全体で、産業の高度化が起こっているという流れは、今後も恐らく止まらないだろうと思います。

今後は、人材の流動化というのがもっと激しく始まりますし、レアメタルを含めて、エネルギーとか資源等に関しての国家戦略、技術外交というのが、ある意味では非常に重要になってくると思われます。さらに、来年は、技術外交に経済外交がドッキングするという大きな転換期が来るのではないかと思います。日本の存在感ないしは危機感が薄れ始めている状況の中で、日本が、科学技術政策やイノベーション政策に関して、迅速な対応を取ることが求められています。

現在、アジア各国は、日本の科学技術を呼び込むということで必死に動いていますが、日本が持っている科学技術力をただ外に出すだけではなく、それを日本にとっても役に立つイノベーションにどう結びつけていくかということが大事になってくると思います。そういった話を中心に、最初のディスカッションで行われるのではないかと思います。

また、後半では、日本自身の存在感がなくなっているとか、アジアの問題に対する対応意識が非常に低いのではないかと、グローバル人材が不足していると言われる中で、幾つかの事例として、実際にアジアと共にイノベーションに従事している人がいるのだというお話が聞けるのではないかと思います。本日のシンポジウムが、今後のアジアの新しい時代を切り開き、様々な課題を解決するための方向性を見出すことができるものと希望しております。

簡単ですが、ご挨拶と致します。